



Rehabilitation of the Hand

by C. B. WYNN PARRY

私達 PT, OT, が対象とする疾患は多岐に渡っているが、中でも Facilitation technique を駆使する中枢神経障害に対し多くの目が注がれている。ここに紹介する本は“手のリハビリテーション”の題名通り hand disabilities を中心に末梢神経障害を広くとらえようとする実践図書である。理論と実際がバランスよく解説されているので非常に理解しやすく、著者が初版の序文で強調しているように、できるだけ詳しく且つ“the usual way”に、すなわち日々の治療場面でセラピストが実際に患者に応用できる内容を沢山組み入れてあるのが特徴である。この本が世に出たのは 1958 年であるがそれ以降 hand をとり扱う書籍も多く出版されているし、また hand surgery や hand disabilities のリハビリテーションの内容も変化に富んで来たことは当然の事実である。この本もその第 3 版で内容にも歴史の変遷がうかがえる。本は 9 章から成っており hand disabilities の発生から障害者の再就職の問題まで一貫性のある構成であ

る。構成順にながめてみると、第 1 章が手の機能解剖、第 2 章は腱損傷に対する術後管理をどうするかが主題であるが沢山の症例をもとに flexors tendon lesion, F.P.L lesion, extensors の lesion に大別して述べてある。第 3 章は末梢神経損傷で nerve lesion による手指機能の特徴とその代償運動、スプリント処方が主で PT, OT の実際（検査、治療）についてかなりページを費している。第 4 章電気診断、第 5 章は骨折、関節症や拘縮等による手指の stiffness に対するセラピー。第 6 章から順次リハビリの原理、上肢切断、関節リウマチの管理、と続き最後に手の機能を失った者が背おう再就職の問題を紹介してしめている。書名から判断すると OT 分野に属する図書と考え勝ちであるが hand disabilities に興味を持つ PT にも一読を勧めたい本である。

(Butterworths, 1958)

(自治医科大学リハ科、理学療法士 谷岡 淳)

慢性分裂病

Thomas Freeman 他著・小林八郎訳

精神病院に勤め始めた頃は、とにかく患者にぶつかってみようという気持が強く、殆んど本らしい本も読まずに毎日を過ごしていた。最近、また少し本が読みたいくなり、外見も質素で、ごく平凡なタイトルに魅かれて何気なく読んでみた。

1958 年に出版された（邦文出版は 1968 年）200 頁に満たない翻訳書であるが、スコットランドの王立精神病院で行なわれた慢性分裂病を対象にした、当時としてはこれは実験的な治療を 2 年間試みた結果の報告論文である。著者ら（精神分析者、精神科医、臨床心理学者）は精神分析学的仮説を慢性分裂病の理解と治療のために臨床で実践し、具体的な臨床例をふんだんに引用しながら分裂病論とその治療を述べている。彼らの立場を結論のところから引用してみると、「…、分裂病の基礎障害は自我境界の適切な発達と維持との障害であるとみなし……、もっとも痴呆のはなはだしい患者でも、自我が完全に失なわれてしまうものでないことを強調する。そして依然として正常な自我機能が留保されており、それが治療セ

ンターのもつ自我確立の雰囲気の中で次第に発達していくことを述べた。……我々の理論構造のうちで最も重要な成果は、慢性分裂病患者を……積極的に活動する人間として回復させる治療プログラム応用できることである……」という具合になる。

いささか大上段にふりかざしている感もするが、分裂病に対する精神分析的な見方はまだまだ異端的存在である日本の現状を考えると、時代や文化のへだたりを越えた親近感と共感を抱かせてくれる本である。精神分析の概念自体がかなり難解なので前半はとりつきにくいかもしれないが（第 2～3 章）、この辺はあまりこだわらずに読んでみたらどうだろうか。分裂病論そのものよりも、ともするとマンネリに陥りがちな臨床でのカンフル剤みたいな働きをしてくれる。精神科関係の人々に一読、いや再読をおすすめしたい。

(医学書院、B5 版、1968 年、絶版)

(日下部病院、作業療法士 富岡 昭子)